

# 研究奨励交付金（若手奨励研究） 報 告 書

令和4年度採択分  
令和5年3月31日作成

研究課題名（和文） A大学看護学部の成人看護学演習におけるOSCEの評価と今後の課題

研究課題名（英文）

研究代表者

氏 名 村田 和子  
福岡県立大学 看護学部・助教

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
村田 和子	看護学部・助教	文献検索、データ分析、報告書執筆
福田 和美	看護学部・教授	文献検索、データ分析

研究奨励交付金（配分額）

134,500円

研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

本研究の目的は、成人看護学演習後の客観的臨床能力試験（OSCE）の評価を行い、現状と課題を明らかにすることである。2022年度成人看護学演習におけるOSCEで、学生は血糖測定、術後観察、術後離床の3つの設定課題のいずれかを受験した。OSCEを受けた3年次生89名にWebでの自記式質問紙調査を依頼し、回答があった53名（回収率59.6%）を分析対象とした。OSCEに向けての取り組み状況、OSCEを受ける姿勢、受験についての質問項目は単純集計を行った。受験後に思ったこと、考えたことについての自由記載は、質的帰納的に分析を行った。分析の結果、学生は事前に自己学習、技術練習を行って受験に臨んでいた。そして事前練習と受験による成果を自覚していた。自由記載の分析では【自己課題の明確化】【看護技術の修得と学習意欲の向上】【状況に即した看護実践の難しさ】【事前練習および受験の成果】【臨地実習における看護実践の有用性】の5つのカテゴリが抽出された。成人看護学演習においては、看護実践能力の強化に向けて臨地に近い状況を設定し、学生が時間を意識できるようシミュレーション教育の内容の充実が必要である。今後の課題として、学生のOSCEに対する理解を深めること、十分なフィードバックの時間を確保すること、教員評価と合わせたOSCE評価の検討が示唆された。

研究分野／キーワード

成人看護学、演習、客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination: OSCE）

## 研究開始当初の背景

少子高齢化社会や疾病構造の変化により、社会においては看護職に対するニーズや期待が高く、看護職には多様な看護技術と専門的知識とともに高度な看護実践能力が要求される。看護学教育の在り方に関する検討会において看護実践能力の育成を充実させることの必要性が指摘されて以降、看護系の教育機関においては、臨床実践能力を客観的に評価する客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下OSCE）を導入する教育機関が増えている。OSCEはペーパーテスト等で測定することのできない技能等の精神運動領域や態度・習慣などの情意領域を評価し、学生の能力を査定する方法として有用とされている。看護基礎教育におけるOSCEの成果は、OSCEを受けることにより、既習の知識をどのように活かすべきか考える機会になること、自己の技術の振り返りや新たな課題の明確化、臨床に近い状況でOSCEを受けることで自信が持て、獲得した技術を臨床実習で役立てるといった実践の場での効果も見られている。そのため、看護実践能力および看護技術の評価や学生が自己の看護技術の修得レベルを自覚する機会としてOSCEの導入を検討している教育機関もある。しかし、OSCEを実施する上での課題として、OSCE時の課題設定、自主練習環境の整備や模擬患者の効果的な導入、教員の情緒的支援や効果的なフィードバックが挙げられている。また、わが国の看護系大学のOSCEの特徴として、OSCE導入の目的、OSCEの対象者、導入領域、具体的な運用の仕方、設定課題、評価およびフィードバックが各大学で異なっている。

A大学では3年次の各論実習前に、専門領域の看護実践能力を強化するために看護学演習が配置されている。成人看護学演習Ⅱでは、事例患者の状況に応じた看護技術の選択とその根拠を明確にし、シミュレーション教育を用いて、安全・安楽な看護実践方法の修得を目指している。そして、演習における看護実践力の評価として、2019年度より看護技術試験をOSCEと位置付けて実施している。しかし、OSCEを導入して3年が経過するが、OSCEの準備、実施、フィードバックの一連の運用に関しては、教員の主観的評価のみで学生からの客観的評価は行っておらず、評価は十分とはいえない。看護基礎教育において看護実践能力の育成が求められていることや成人看護学演習の質の向上のためにも、現在行っているOSCE運用に学生の客観的評価も取り入れ、教育内容の改善を行う必要がある。そこで、本研究によってA大学の3年次生の成人看護学演習におけるOSCEを評価し、成人看護学演習におけるOSCEの現状と課題を明らかにすることで、効果的なOSCEの運用や学生の看護実践力を強化するための教育方法の基礎的資料になり、今後の教育内容の充実に貢献できると考える。

## 研究の目的

本研究は、成人看護学演習で実施しているOSCEの評価を行い、現状と課題を明らかにすることを目的とする。

## 研究の方法

### 1. 研究デザイン

自記式質問紙による調査研究

### 2. 研究対象者

A大学看護学部の2022年度成人看護学演習におけるOSCEを受けた3年次生89名

### 3. 研究期間

令和4年9月～令和5年3月

### 4. 実施したOSCEの概要

- ・ 学生は3つの設定課題（血糖測定、術後観察、術後離床）のいずれかを受験した。
- ・ OSCE実施の1週間前に個々の学生が実施する技術項目を提示し、課題（事例患者の状況設定）はOSCE直前に提示した。
  - ①血糖測定：低血糖症状がみられている患者の対応
  - ②術後観察：術後3日目に呼吸困難を訴えている患者の観察と対応
  - ③術後離床：術後1日目の初回歩行時の援助
- ・ 1名の学生につき7分で実施し、終了後にOSCEを担当した教員が学生の実践に対するフィードバックを行った。
- ・ 成人看護学演習の初回にOSCEのオリエンテーションを行い、OSCE前日までの期間はいつでも学生が自主的に技術練習を行える環境を整えた。

### 5. データ収集方法

OSCEが終了し、成人看護学演習の成績交付後に無記名の自記式質問紙調査を実施した。設問内容は先行研究をもとに研究者らで作成し、Ⅰ. OSCEを受けるにあたっての取り組み状況に関するもの（準備性、主体性）、Ⅱ. OSCEを受ける姿勢（身だしなみ、態度）、Ⅲ. OSCEの実施に関するもの、Ⅳ. OSCEを振り返り考えたこと、思ったことである。Ⅰ～Ⅳに関しては、「①非常に当てはまる、②かなり当てはまる、③あまり当てはまらない、④ほとんど当てはまらない」の各項目4件法で行い、Ⅴは自由記述とした。質問紙はGoogleフォームを用いたWeb回答とし、回答の送信をもって研究参加への同意とした。

（設問内容）

#### Ⅰ. OSCEを受けるにあたっての取り組み状況について

- ①授業の復習や自己学習などの事前学習を行って、試験に臨んだ
- ②OSCEに向けて教員に技術指導やアドバイスを求めた
- ③OSCEに向けて技術練習をしましたか
- ④Ⅰ-③で「練習した」と回答した方は、練習した回数をそれぞれ記入してください
- ⑤Ⅰ-③で「練習した」と回答した方は、どのくらい練習しましたか
- ⑥Ⅰ-③で「練習しなかった」と回答した方は、その理由を選んでください

#### Ⅱ. OSCEを受ける姿勢について

- ①身だしなみ（ユニフォーム、髪、爪、アクセサリなど）を整えることができた
- ②真剣な態度で取り組むことができた

#### Ⅲ. OSCEの受験について

- ①OSCEの受験は緊張した
- ②該当した技術を正確に行うことができた
- ③患者さんの安全・安楽に考慮することができた

- ④患者さんが理解しやすい言葉で説明ができた
- ⑤患者さんに対して援助について説明し、同意を得ることができた
- ⑥OSCEの課題は難しかった
- ⑦試験時間は適切だった
- ⑧教員からのフィードバックは参考になった
- ⑨OSCEを受けて自己の課題が見つかった
- ⑩OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ
- ⑪OSCEのオリエンテーションから受験後までを振り返り、OSCEの目標を達成できた

IV. OSCEを受けて、考えたこと、思ったことを自由に記述してください

6. データ分析方法

質問紙調査に関しては、単純集計を行った。

自由記述の内容については、記述内容の意味内容を損ねないようにコード化し、類似性と相違性に基づいて抽象度を上げてカテゴリ化し、質的帰納的に分析した。分析は研究者間で検討を行い、カテゴリ化を行った後、記述内容との乖離がないかの確認を行った。

7. 倫理的配慮

福岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者が所属する学部の管理者に対して、研究の趣旨、研究方法、倫理的配慮等を記載した文書をもって、施設における研究対象者募集のチラシの掲示の承諾を得た。研究対象者に対して、成人看護学演習の成績交付後に、研究への協力は自由意志であり、研究に協力しないことで不利益を被らないことを説明した。質問紙への回答は研究者が不在の場所で行われるよう配慮し、回答の送信をもって研究参加への同意とした。

研究の主な成果

【結果】

A大学看護学部の2022年度成人看護学演習におけるOSCEを受けた3年次生89名のうち、回答があった53名（回収率59.6%）を分析対象とした。

1. OSCE受験後の質問紙調査の結果

単純集計の結果を、表1、図1、表2、表3、表4に示した。

1) OSCE受験にあたっての取り組み状況

「授業の復習や自己学習などの事前学習を行った」については「非常に当てはまる」24名（45.3%）、「かなり当てはまる」29名（54.7%）で、全員が授業の復習や自己学習を行って試験に臨んでいた。「事前に教員に技術指導やアドバイスを求めた」は「非常に当てはまる」11名（20.8%）、「かなり当てはまる」22名（41.5%）で、6割の学生が自ら教員に技術指導やアドバイスを求めて試験に臨んでいた。

表1 OSCEを受けるにあたっての取り組み状況 n = 53 (%)

項目	非常に	かなり	あまり当て	ほとんど当て	計
	当てはまる	当てはまる	はまらない	はまらない	
<b>●OSCEを受けるにあたっての取り組み状況について</b>					
Q1 授業の復習や自己学習などの事前学習を行った	24 (45.3)	29 (54.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 教員に技術指導やアドバイスを求めた	11 (20.8)	22 (41.5)	18 (34.0)	2 (3.8)	53 (100.0)

「受験に向けての技術練習」について、「練習した」と回答した者は53名（100%）であった。練習した技術項目の回数を図1に、技術練習の時間を表2に示した。

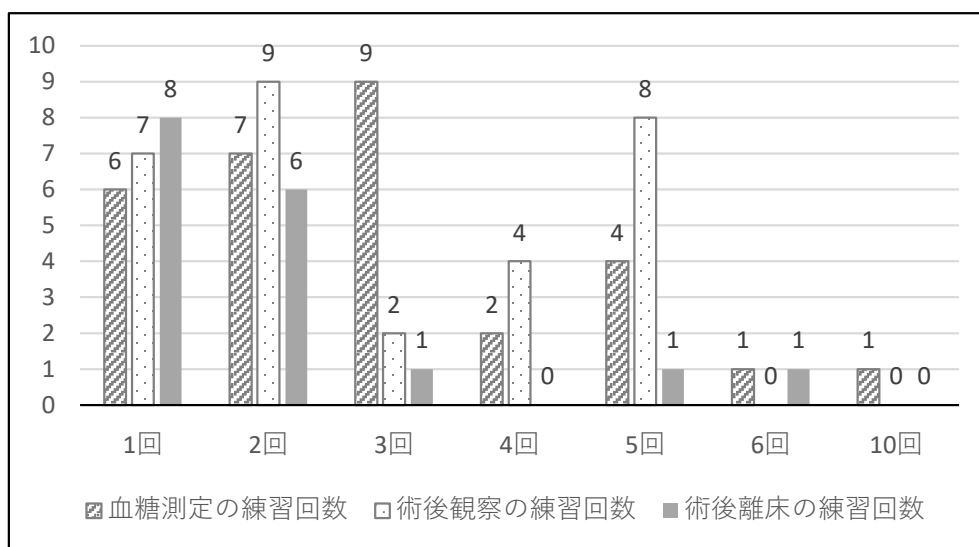


図1 技術項目の練習回数

表2 技術練習の時間

n = 53 (%)

項目	1時間未満	1時間以上	2時間以上	3時間以上	計
Q7 Q3で「練習した」と回答した方は、どのくらい練習したか	8 (15.1)	26 (49.1)	9 (17.0)	10 (18.9)	53 (100.0)

## 2) OSCEを受ける姿勢について

OSCEを受ける姿勢について、「身だしなみを整えることができた」は「非常に当てはまる」48名（90.6%）、「かなり当てはまる」5名（9.4%）であった。「真剣な態度で取り組むことができた」は「非常に当てはまる」43名（81.1%）、「かなり当てはまる」10名（18.9%）であり、学生は身だしなみを整え、真剣な態度で試験に取り組んでいた。

表3 OSCEを受ける姿勢について

n = 53 (%)

項目	非常に当てはまる	かなり当てはまる	あまり当てはまらない	ほとんど当てはまらない	計
<b>●OSCEを受ける姿勢について</b>					
Q1 身だしなみを整えることができた	48 (90.6)	5 (9.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 真剣な態度で取り組むことができた	43 (81.1)	10 (18.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)

### 3) OSCE受験について

「OSCEを受験することの緊張」は、「非常に当てはまる」40名（75.5%）で最も多く、「かなり当てはまる」10名（18.9%）、「あまり当てはまらない」3名（5.7%）であった。

「該当した技術を正確に行うこと」は「非常に当てはまる」9名（17.0%）、「かなり当てはまる」32名（60.4%）で、「患者の安全・安楽に考慮することができた」は「非常に当てはまる」16名（30.2%）、「かなり当てはまる」27名（50.9%）であり、75%以上の学生が患者の安全・安楽を考慮しながら正確な技術が実施できたと認識していた。

「患者が理解しやすい言葉で説明ができた」は「非常に当てはまる」14名（26.4%）、「かなり当てはまる」33名（62.3%）で、「患者に援助について説明し、同意を得ることができた」は「非常に当てはまる」16名（30.2%）、「かなり当てはまる」27名（50.9%）であり、80%以上の学生が患者への分かりやすい説明と同意を得ることを意識していた。

「OSCEの課題は難しかった」については「非常に当てはまる」8名（15.1%）、「かなり当てはまる」33名（62.3%）であり、75%以上の学生が状況設定の課題に難しさを感じていた。「試験時間は適切だった」は「非常に当てはまる」23名（43.4%）、「かなり当てはまる」17名（32.1%）、「あまり当てはまらない」11名（20.8%）、「ほとんど当てはまらない」2名（3.8%）であり、75%の学生は実施時間が適切と感じていたが、25%の学生は不適切と感じていた。

「教員からのフィードバックは参考になった」は「非常に当てはまる」42名（79.2%）、「かなり当てはまる」11名（20.8%）であり、全員が教員からのフィードバックの効果を感じていた。

「OSCEを受けて自己の課題が見つかった」は「非常に当てはまる」39名（73.6%）、「かなり当てはまる」14名（26.4%）で、「OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ」は「非常に当てはまる」41名（77.4%）、「かなり当てはまる」12名（22.6%）であり、全員が受験後の自己課題に気づき、今後の学習や実習への有用性を感じていた。

表4 OSCEについて

n = 53 (%)

項目	非常に 当てはまる	かなり 当てはまる	あまり当て はまらない	ほとんど当て はまらない	計
<b>●OSCEについて</b>					
Q1 OSCEの受験は緊張した	40 (75.5)	10 (18.9)	3 (5.7)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q2 該当した技術を正確に行うことができた	9 (17.0)	32 (60.4)	11 (20.8)	1 (1.9)	53 (100.0)
Q3 患者の安全・安楽に考慮することができた	16 (30.2)	27 (50.9)	10 (18.9)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q4 患者が理解しやすい言葉で説明が出来た	14 (26.4)	33 (62.3)	6 (11.3)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q5 患者さんに援助について説明し、同意を得ることができた	16 (30.2)	27 (50.9)	9 (17.0)	1 (1.9)	53 (100.0)
Q6 OSCEの課題は難しかった	8 (15.1)	33 (62.3)	12 (22.6)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q7 試験時間は適切だった	23 (43.4)	17 (32.1)	11 (20.8)	2 (3.8)	53 (100.0)
Q8 教員からのフィードバックは参考になった	42 (79.2)	11 (20.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q9 OSCEを受けて自己の課題が見つかった	39 (73.6)	14 (26.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q10 OSCEを受けたことは今後の学習や実習に役立ちそうだ	41 (77.4)	12 (22.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	53 (100.0)
Q11 OSCEの目標を達成できた	17 (32.1)	32 (60.4)	4 (7.5)	0 (0.0)	53 (100.0)

## 2. OSCEを振り返って、考えたこと、思ったこと

自由記述の内容を分析した結果、コード数53、サブカテゴリ21、カテゴリ5つが抽出された。分析結果を表5に示した。【自己の課題の明確化】は学生がOSCEを体験し自己の気づきや教員によるフィードバックによって自己の課題が明確になったことである。【看護技術の修得と学習意欲の向上】はOSCE受験と教員の評価・助言によって学生の学習に対する意欲と状況に即した看護技術修得に対する意欲が向上したことである。【状況に即した看護実践の難しさ】は学生が事例患者の状況設定に対応した看護実践というOSCEの課題を体験し、時間制約がある中で状況を判断した看護実践の難しさを実感したことである。【事前練習および受験の成果】は学生が事前練習やOSCE受験により自己の技術力の向上や知識の確認といった成果を感じたことである。【臨地実習における看護実践の有用性】は学生が臨地を想定した状況下での看護実践が今後の実習に活かせそうだと認識したことである。

表5 OSCEを振り返って考えたこと、思ったこと

カテゴリ	サブカテゴリ
自己課題の明確化	受験とフィードバックによる新たな課題の気づき
	的確なフィードバックが参考になる
	フィードバックの良さを実感
	アセスメントの重要性に気づく
	実施後のリフレクションの必要性を自覚する
	看護技術力を獲得する必要性を自覚する
	練習不足を自覚する
	即時の判断や臨機応変な対応に向けて学習の必要性を自覚する
看護技術の修得と学習意欲の向上	教員からの評価やポジティブな助言による学習や実習に対する意欲の向上
	看護技術の修得に対する自信
	状況に即した看護技術の修得に対する意欲
状況に即した看護実践の難しさ	状況に即した看護実践が難しい
	時間制限により一連の流れの中で必要な全ての看護ができなかった
事前練習および受験の成果	十分な技術練習による技術力の向上
	試験や事前練習は自分自身のためになる
	状況設定の試験によって自己の知識を確認できる
	臨地と同じような状況の試験は技術の向上に繋がる
	看護技術に対する客観的評価の必要性
臨地実習における看護実践の有用性	臨地を想定することで緊張感を持って実施できた
	臨地実習に向けて役立つ技術の実施
	看護実践を実習に活用できそうだと認識

### 【考察】

#### 1. 成人看護学演習におけるOSCEの現状

OSCEの取り組み状況については、学生全員が授業の復習や自己学習などの事前学習と事前の技術練習を行ってOSCEに臨んでいた。そのうち60%の学生が自ら教員に技術指導やアドバイスを求めて練習をしており、OSCEに向けて前向きに取り組んでいることが伺えた。また、OSCEでの実践を振り返って、事前の十分な技術練習による自己の技術力の向上、試験や事前練習は自分自身のためになるといった事前学習とOSCEの成果を感じていた。このようなOSCEに向けた主体的な学習や看護技術の練習といった成果は、先行研究と同様であった。

OSCE受験については、全員がOSCE後に課題が明確になったと回答しており、フィードバックを受けたことや受験を通して自己の学習課題を明確にしていた。また、全員が教員からのフィードバックは参考になったと回答し、教員からの評価やポジティブな助言が学習や実習に対する意欲の向上、看護技術の修得に対する自信に繋がっていた。OSCEでは事例設定を行い試験直前に課題を提示したが、75%の学生が課題に難しさを感じており、時間制限によって一連の流れの中で必要な全ての看護ができず、状況に即した看護実践を行うことに困難を感じていた。学内演習では、事例に対する援助の必要性をアセスメントして計画を立案し、看護技術の選択や実践方法などを十分に検討した後に看護実践を行う。事例患者に合った安全で安楽な看護実践に重きを置くため、学生が事例患者の看護に要する時間を意識しながら実践することは少ない。そのため受験後の振り返りの中で、時間制限があっても必要な看護を十分できなかった、練習通りの技術では時間内に終わらなかったという感想を持ったと考えられる。その一方で、臨地に近い状況設定によって学生はアセスメントの重要性、即時の判断や臨機応変な対応に向けての学習の必要性、実施後のリフレクションの必要性を自覚していた。そして、臨機応変な対応ができなかったことで状況に即した看護技術の修得に対する意欲を示していた。3年次の各論実習前の看護学演習では、臨地実習に向けて看護実践力を強化することが求められる。よって、成人看護学演習においてはより臨床に近い状況設定を行い、臨地同様に学生が時間を意識して看護実践が行えるようシミュレーション教育の内容を吟味する必要があると考える。

今回は成人看護学演習後にOSCEを受けた3年次生を対象として質問紙調査を行い、成人看護学演習におけるOSCEの評価を行った。今後はOSCEに携わった教員の評価も合わせた検討を行い、OSCEの効果的な運用と教育内容の充実を図っていきたい。

## 2. 成人看護学演習におけるOSCEの課題

臨地実習に向けて、成人看護学演習では看護実践力を強化することが求められるため、OSCEの課題設定は臨地実習で学生が経験する状況設定で7分以内で実施できる内容とした。OSCE実施に際しては、成人看護学演習の初回時とOSCE実施の1週間前に、OSCEの目的、概要、方法、OSCEに向けてのスケジュール、事前練習の環境についてオリエンテーションを実施した。しかし、必要な全ての看護実践を確実に実践しようとする気構えが時間を考慮しない実践となり、時間内に看護実践が終わらない学生がいた。また90%以上の学生がOSCE実施時に緊張したと回答しており、時間内に終わらなかった要因にはOSCE実施時の緊張も影響していたと思われる。そのため、学生がOSCE受験の目的を理解し、OSCE実施時の環境や課題を時間内に実践するためのイメージをした上で事前の準備が行えるようなオリエンテーションの方法を再考して学生のOSCEに対する理解を深めること、成人看護学演習においても実施時間を明確にし、限られた時間の中で患者の状況に応じた観察や援助を行えるような授業設計を行うこと、演習後にも学生が反復して実践できる環境を提供することが必要と考える。また、効果的にOSCEを実施するためには教員による適切な指導・評価、適切なフィードバックが求められるとされ、今回の結果からもフィードバックが学習効果を高めていることが明らかとなった。教員からのフィードバックの内容は、評価項目を視野に入れながら挨拶・自己紹介などの基本的な介入、コミュニケーション技術、看護技術の正確さ、ボディメカニクスなど多岐に及び、学生の今後の成長や学習意欲につながるようなフィードバックにするためには、十分なフィードバックの時間を確保することが必要である。さらに学生は臨地を想定して緊張感を持ち、看護技術や看護実践を実習に活用できそうだと認識しており、全員がOSCE受験による今後の実習への有用性を感じていた。OSCEの受験が学生の看護実践能力の育成・強化や臨地実習で活かされるように、成人看護学だけでなく大学全体でOSCEの実施に取り組むことが重要である。



## 【参考文献】

- 1) 厚生労働省 (2019) : 看護基礎教育検討会報告書.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2022年5月5日検索)
- 2) 文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告書.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf) (2022年5月18日検索)
- 3) 伴信太郎 (1995) : 客観的能力試験－臨床能力の新しい評価法－. 医学教育, 26 (3) , 157-163.
- 4) 安井大輔, 小澤知子, 濱田麻由美, 他 (2014) : 術後早期離床ケア OSCEのふりかえりをとおしての学生の学びと気づき. 東京医療保健大学紀要, 9 (1) , 23-30.
- 5) 多賀昌江, 樋之津淳子, 福島眞理, 他 (2009) : 学生から見た客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義. 札幌市立大学研究論文集, 3 (1) , 27-34.
- 6) 高島利, 荒尾博美. (2021) : 看護系大学生を対象とした客観的臨床能力試験 (OSCE) の現状に関する文献レビュー. 熊本保健科学大学研究誌, 18, 43-56.
- 7) 小西美里. (2013) : 日本の看護教育におけるOSCEの現状と課題に関する文献レビュー. 上武大学看護学部紀要, 8 (1) , 1-8.
- 8) 笹本美佐, 小園由味恵, 奥村ゆかり, 他 (2012) : 実習前OSCEを通して看護学生が実感した学習効果. 日本赤十字広島看護大学紀要, 12, 79-87.
- 9) 大森眞澄, 矢田昭子, 三瓶まり, 他 (2011) : 試行的実践から明らかとなった看護学生に対するOSCEの意義と課題. 島根大学医学部紀要, 34, 9-64.
- 10) 三味祥子, 吉田和美, 山本加奈子, 他 (2016) : 2年次看護学生が基礎看護学実習前のOSCEをとおして臨地実習で実感したOSCEの学習効果. 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 89-97.
- 11) 鈴木美代子, 井上都之, 高橋有里, 他 (2018) : 4年次の看護技術統合演習に客観的臨床能力試験 (OSCE) を導入した教育効果. 岩手県立大学看護学部紀要, 20, 39-52.
- 12) 園田裕子, 吉田理恵, 前田陽子, 他 (2017) : 客観的臨床能力試験 (OSCE) における形成的評価を高めるフィードバックのあり方とその課題. 日本赤十字北海道看護大学紀要, 17, 9-17.
- 13) 中島明美, 雑賀美智子, 猪股久美, 他 (2018) : 初年度OSCEにおける学生の到達度評価と今後の課題. 帝京平成大学紀要, 29, 63-74.
- 14) 吉田理恵, 園田裕子, 前田陽子, 他 (2018) : 本学における2年次客観的臨床能力試験 (OSCE) 前の演習の展開とその課題. 日本赤十字北海道看護大学紀要, 18, 15-21.
- 15) 北川公子, 櫻井美奈, 菱刈美和子, 他 (2016) : 本学看護学部における3年次OSCEの実施と今後の課題. 共立女子大学看護学雑誌, 3, 62-69.
- 16) 藤井瑞恵, 進藤ゆかり, 内田雅子, 他 (2012) : 看護OSCE受験生の心理的反応および学習意欲の関係と課題－学生アンケート調査を通して－. 第42回日本看護学会論文集, 看護教育, 10-13.
- 17) 中村恵子. (2019) : 看護教育における効果的なOSCEの実施. 看護教育, 60 (9) , 720-725.
- 18) 中村恵子編. (2011) : 看護OSCE. メヂカルフレンド社.

## 主な発表論文等

なし

## その他の研究費の獲得

なし